

季節の豊穡

川村二郎



小沢書店

内部の季節の豊穡

昭和五十三年九月十五日印刷
昭和五十三年九月二十日発行

著者 川村二郎

発行者 長谷川郁夫

発行所 小沢書店

東京都千代田区富士見二一五―十二

電話(東京)二六三―九二一八(代)

印刷所 精興社

製本所 大口製本

製函所 日東工業

内部の季節の豊穡 目次

I

古井由吉——主題を求める変奏 9

黒井千次 28

1 「反寓話」の空間 28

2 『失うべき日』 52

小川国夫 59

1 自覚せるミダス 59

2 『彼の故郷』 76

河野多恵子 89

1 『不意の声』 89

2 『草いきれ』 98

3 『谷崎文学と肯定の欲望』 111

II

内部の季節の豊穰——一九七〇年の文学 125

「本音」の危機——一九七二年の文学 155

「文弱」の衰頹——一九七四年の文学 165

二つの「ment」の谷間で——「内向の世代」解嘲 189

III

幸田露伴——『蝸牛庵聯話』頌 209

泉鏡花 216

1 鏡花の旅 216

2 鏡花の樂園 221

折口信夫——『死者の書』 228

蒲原有明——塚穴からの光 238

澁澤龍彦——*amor figurae* 246

後書 259

初出一覧 260

内部の季節の豊穡

古井由吉——主題を求める変奏

古井由吉は美文家である。

処女作「木曜日」の冒頭を読まれるがよい。

鈍色にけふる西の中空から、ひとすじの山稜が遠い入江のように浮び上がり、御越山の頂きを雷が越しきったと山麓の人々が眺めあう時、まだ雨雲の濃くわだかまる山ぶところの奥深く、幾重もの山ひだにつつまれて眠るあの溪間でも、夕立ち上りはそれと知られた。

この文体は、もちろん口語文ではあるが、文語体にしたらむしろふさわしいと思われるような印象がある。明治の作家たちの練達した雅文調、紅葉や一葉や露伴や鏡花の、言文一致はいまだ熟さず、西欧近代の写実主義流も深く知られてはいない時期における、艶にやさしく流麗

な類型的文体を、それは思いださせるし、さらに遠く、王朝の散文の翳々たるしらべにまで、連想を誘うところさえ、あると感じられる。ここでは抒情と叙事がいわば未分化のまま、一つの観察の中に溶けこんでいるようである。

その意味で、この文体は、一応反近代的と呼ぶことができる。いや、「反」^{アインデ}といえはすでに意志的な拒否を前提にするようにきこえるから、非近代的と呼んだ方がいいかもしれない。この流麗さはきわめて自然で、なんらかの拒否、あるいは抵抗にもとづく、ことさらな装いとは受け取られない（たとえば三島由紀夫やその亜流におけるごとき）。ごく自然に、古風な叙述形式が、この物語作者の生理に滲みこんでいて、そこから自然な発声としてこの表現が浮び上ってくると見える。

何よりも、この古風さを、ぼくは現代作家古井由吉の美德に数えたい。近代写実主義は、特に日本文学に移入されたそれは、美文を、真実を押し歪め、覆い隠すものとして、潔癖に排斥した。千篇一律の因襲的表現の蒼ざめた人工性を打ち破り、個々の人物や事実をありのままにうつし取ることを旨とする点で、これはたしかに、新しい表現の領域をひらきはしただろう。だが、湯とともに赤児を流すように、それは、硬直した形式とともに、形式というものが本来はらんでいる、優雅な均斉や安定した立体感への可能性をも、抹殺してしまった。そして、真実を描くと称して、文学的には浅薄な嘘でしかない、まな事実を、無秩序に羅列することを好みすぎた。「輝くものすべてが黄金ではない」という諺がある。写実主義は、輝くものこと

ごとくをメッキかガラス玉にちがいないと最初から疑ってかかり、黄金も輝くものであるということを失念していた。その結果、鈍くくすんだ古鉄のようないわゆる「真実」の堆積が、所狭しと文学の領分を占拠することになった。

いうまでもなく、この堆積に眉をひそめ、言語の美の小王国を、同じ領分の一隅に建設しようとする人たちもいた。しかし、無秩序に対する秩序、無形式に抗する形式を考える立場は、ともすれば、堅牢な外観を達成することに気をはやらせがちである。堅牢なのはいい。しかしはやるあまりに、外観はなるほど堂々と築かれているが、内実には手が廻らず、空洞のままなのではないか、あるいは、あまりに意図的な構築作業が、充実した形式には必ずそなわっているはずの自然な流露感を奪い、痙攣的な緊張の息苦しさしか、見る者に伝えてこないのではないか、そんな具合に疑われることも、この場合、おそらく稀ではない。常識的な線であって、鷗外、芥川、三島、彼らを代表とする三代の文学の系譜に、ぼくは、今述べたような、強いられた緊張の跡を見る。

古井由吉の文章は、この系譜とは別の文脈に属している。この系譜より古い、とはすなわち、伝統と新思潮との軋轢を意識する以前の、のどかな和文脈のうちにある。そのことが、この文章にあるやわらいだ安定のハーモニーを与えている。緊張し、凝縮する代りに、この文章はたえずさざなみ立ち、振動は振動を呼びおこしながら、均質な平面の上に伸びひろがり、全体はゆれ動く無限の曲線が形づくる華やかな織物のような観を呈することになる。

それでは、この小説家は、要するに、やさしくみやびな伝統の担い手なのか、その通り、とぼくはひとまず答えよう。そしてすぐつけ加えて、われわれのみやびの伝統には、どこまでも伸びひろがる平面の上の、言葉の文の巧みさばかりではなく、この平面を暗くかすませ、その境界を曖昧にし、何やらおそろしげなものの姿を曖昧な薄暗がりの中から浮びださせる力もあるのだ、この力を古井氏は、敏感な触手で探り当てている、ということにしよう。

先にかかげた「木曜日に」冒頭のような文章は、いかにも綿密な書きぶりではあるが、それ自体として、ことさらに曖昧な所はない。見る人によっては飾りすぎているとも思い入れが過剰だとも見るにちがいない、この種の細密描写も、ともかく描写の領域にとどまって、外界の風景を映しだすことをもっぱらに心がけているのだと理解はされる。もしそれだけのことならば、文章の筆者を、観察の角度に関していささか偏した趣向を持つ、言葉の風景画家、とでも規定することが可能だろう。ただしその場合でも、その観察の角度の偏りは、文体の安定にもかかわらず、一種奇妙な落ちつき悪さを、読者の心に後味として残すと思われるのだが。

その独特な視覚が、外界から内界へと、なんの不思議もないように移行するのを眺める時、読者は奇妙な後味を感じるだけではすまされなくなる。

内面を描くという作業は、もちろん、今日の小説の世界で、格別珍しいことでもない。というより、近代写実主義の無力、真実をもとめて事物の形骸しかつかみ取ることのできないこの文学技法の欠陥が、場合によっては不当な強調と思われるほどにあげつらわれる昨今では、元

來十九世紀風リアリズムの信奉者たるべき資質の持主すら、リアリズムの拡大とか全体小説とかの名のもとに、内面描写に力を傾けることも稀でない。もっとも、外を書き内を書けば、それで全体があらわれると考えるのは、かつてのリアリズムの一面にあったと同様の、あまりにも無邪気かつ傲慢な、表現に関する帝国主義的幻想にすぎまいが。それは別にしても、内面描写の隆盛は、ただ外界に目を閉じてひたすらに内部の消息に耳傾けるといふばかりでなく、外部をも内面化して、一切が閉ざされた暗黒の境界で、明確な輪郭を持たぬ幻像となって浮遊するかのような趣を呈する作品を、数多く生みだしている。

この方向でも、すぐれた作品が成立する機会がなくはないだろう。思いつくままに言えば、石川淳の一時期の作、島尾敏雄のある種の短篇などに、内と外との混淆が幸福な調和にまで達している例を見ることができるかと思う。しかし総じて、この方向では、いたずらに作者の深刻めかした顔が目映るばかりで、肝腎の作品世界からは何一つ見えてこない、ということになるのが落ちのようである。

古井氏の場合も、一応、外と内とが分ちがたくなっているとはいえるだろう。その意味で、これらの作品は、当代文学の一傾向に追随している、と考える読者もあるかもしれない。だが、しかし軽率に見るには、この世界構成の機微は、繊細にすぎない。

つまりここでは、外界の内面化に平行して、内界の外面化がたえず同時におこなわれているのだ。外を眺めていた目が、そのままの明るさで、内に眺め入る。暗い環境の中で、特に瞳孔

を拡大して、網膜に入る光の量を調節しようなどという様子はない。その見方には、見えないものを強いても見ようとする、実験的意欲にもとづく作為のかけは、およそつきまわっていない。つまり自然なのだ。しかしそれにしても、そもそも明るい外界の中で、この目が、少しでも瞳孔を縮小しようとしたことがあっただろうか。この目には、太陽さえも裸眼で観測してしまふような、たくましいとも無神経ともいえないような特性があって、もしそれを不自然と感じるなら、この目の前にひろがる内外の風景の一切が、不自然ということになってくるだろう。それに対しては、自然、不自然という通念上の対立概念が、ここではもはや対立と見なされていけないのだ、と答えることができるだろうか。たとえばある一つの対象を描きだすのに、対象の形も色も大きさも度外視して、ことさらにデフォルメしたり、抽象化したりすれば、これはもちろん言葉の普通の用法で自然とは呼ばれまい。自然さは、その形や色や大きさに即した、忠実な写生にある。だが、たとえば人間の顔を描いて、忠実さを追究するために、毛髪の本一本、微細な皺の一筋一筋、毛孔の一つ一つまでも丹念に表現しようとするなら、それを自然と呼ぶことができるか。おそらくあるグロテスクな疎ましい印象が生じて、自然の印象を抹殺してしまふにちがいない。

こういうことを考えると、自然さという通念が、程よい中庸の上に据えられているのだということに気づく。中庸、黄金の中庸という美しい言葉もある。しかしそれは、場合によっては、観察と思考の中途半端を隠蔽するための、きらびやかな衣裳にすぎないのではないか。そう疑